

からだのとしょかん通信

分かりやすい医学情報を集めた「からだのとしょかん」は
外来棟2階にあります。気軽にお立ち寄りください。

2023年8月号

医療用麻薬のギモン、お答えします

緩和ケア内科 中島 真人

がんの治療中には、様々な理由で体に痛みを感じることがあります。痛みを我慢したまましていると、眠れなくなったり、食欲がなくなったり、不安になって十分な治療ができなくなったりします。痛みの治療は、自分らしく生活したり、安心して治療を継続するうえで、とても大切です。

がん治療で用いられる痛み止めのなかに、医療用麻薬と呼ばれる薬剤があります。その名の通り、痛みの治療に使用する麻薬です。当院でも様々な医療用麻薬が使用されています。少量より始め、痛みに合わせてそれぞれの患者さんにあった量を決めていきます。医療用麻薬は現在、世界中で多くの患者さんに使われており、非常に有効な薬ですが、誤解や心配もあり、なかなか上手に使われない一面もあります。今回は、少しでも安心して医療用麻薬を使用して頂けるよう、医療用麻薬の疑問に答えてみたいと思います。

Q. 薬を使うと中毒になりますか？

A. いいえ、中毒にはなりません。

医療用麻薬の中毒(依存)は痛みのない方が、医師の指導なく乱用したときに生じます。

Q. 麻薬を使うと寿命がちぢむのですか？

A. 寿命が短くなることはありません。

痛みに対して、医療用麻薬を使った多くの患者さんの調査では、麻薬の使用量が大量であった人と、そうではなかった人との間に寿命の長さに変わりがなかったことがわかっています。

Q. 使いすぎると効かなくなりませんか？

A. 体が慣れて薬が効かなくなることはありません。

痛みの程度が増した時に、効きが悪くなったと感じることがあります。その場合は、薬の量を増やしたり、薬の種類を変えることで効果を得ることができます。

Q. 医療用麻薬を飲むと、胃が悪くなるのでは？

A. 医療用麻薬は空腹時に服用しても胃に負担をかけることはありません。

Q. 麻薬を使うのは、病気が悪くなったからですか？

A. 医療用麻薬はがん治療の最後に使う薬ではありません。

医療用麻薬を使用する基準は「痛みの程度」です。がん治療の初期から積極的に使用するお薬です。がん治療と生活を両立していくうえで、痛みを我慢したまま過ごすのではなく、痛みのない生活を送ることが大切です。痛みが軽くなれば、痛み止めの量を減らしていきます。

緩和ケア内科では、医療用麻薬の処方だけでなく、痛みでお困りの患者さんに医療用麻薬を安心して使用して頂けるよう、相談やサポートも行っております。ぜひ気軽にご相談ください。

当院で使用される医療用麻薬(強オピオイド鎮痛薬)と主な商品名

		モルヒネ	オキシコドン	ヒドロモルフォン	フェンタニル	タペンタドール	メサドン
経口薬	徐放製剤 (長く効く)	MSコンチン錠 【錠剤】	オキシコンチンTR錠 【錠剤】	ナルサス錠 【錠剤】		タペンタ錠 【錠剤】	メサペイン錠 【錠剤】
	速放製剤 (効き目が早い)	オプソ内服液 【液体】	オキノーム散 【粉末】	ナルラピド錠 【錠剤】	アブストラル舌下錠 【舌下錠】		
	注射剤	モルヒネ塩酸塩注射液	オキファスト注	ナルベイン注	フェンタニル注射液		
	貼付剤				フェントステープ		
	坐剤	アンペック座薬					

痛みの対処法 ～お薬以外の対処法～

緩和ケアセンター
がん性疼痛看護認定看護師 遠藤 あゆみ

痛みは体の危険を知らせてくれる大切なものですが、長く続く痛みはつらいものです。痛みを和らげるためには痛み止めのお薬を使う方法と、お薬以外のケアを行う方法がありますが、両者を併用することで効果が高まります。痛みには表1のように、痛みの感じ方を強くする因子と弱くする因子があります。痛みの感じ方を弱くすることや、気持ちがいい、リラックスできるという感覚を味わえることが、痛みを和らげるうえでは大切です。ここでは簡単にできるケアの一部を紹介します。

さすことは安心感を与え、気持ちが落ちつき、痛みを和らげる効果があるといわれています。痛む部位にそっと手を当て、1秒に5cmくらいの速さでさすってみましょう。手の温もりと手のひらで触れている感覚が痛みを和らげていきます。

お風呂に入ると痛みが楽になる場合は、市販のホットパックや電子レンジで温めたタオルをビニール袋に入れ、やけどをしないよう布などで包み患部に当てると効果的です。反対に冷やすことで痛みが和らぐ場合もあります。他に、好みの固さのマットレスを選び眠りの質を良くすること、クッションを使い楽な姿勢を工夫すること、お部屋の家具の配置を変えて体の動きをスムーズにすることなども効果的です。

また、趣味を楽しんだり、好きな音楽を聴いたり、人と楽しく過ごすことも痛みを和らげます。ご自分に合う方法でお薬以外のケアを行ってみてはいかがでしょうか。

表1 痛みの感じ方に影響する因子

痛みを感じやすくする因子	痛みを感じにくくする因子
不快感 不眠 疲労 恐怖 怒り 悲しみ うつ状態 倦怠感 孤独 内的心理状態 社会的地位の喪失	症状の緩和 睡眠 休息 周囲の人々の共感、理解 人とのふれあい 気晴らしとなる行為 不安の減退 気分の高揚

出典 Twycross R, Wilcock A: トワイクロス先生のがん患者の症状マネジメント(武田文和監訳), 医学書院, 2003

からだのとしょかんの本

からだのとしょかんには、体やこころの痛みに関する本も多く揃えています。



『国立がん研究センターのこころと苦痛の本』

清水 研, 里見 絵理子, 若尾 文彦監修

小学館 2018年発行

がんの療養中や治療後のこころの苦しさやがんの痛み、副作用について知りきちんとケアすることで質のよい生活が送れます。この本では、「精神腫瘍科」「緩和医療科」の医師が、セルフケアの方法や専門的なケアの受け方を解説しています。

このほかにも、退院後の生活の工夫、がん治療に関する新刊本やパンフレットなども多数ございますので、お気軽にご利用ください。

- お役立ち情報 -

からだのとしょかんでは、情報収集に役立つ Web サイトを集めたリンク集を作成しています。

どうぞ、ご利用ください。<https://www.niigata-cc.jp/karada.html>

また当院ホームページで公開している「がん・疾患情報サービス」もぜひご利用ください。

<https://www.niigata-cc.jp/disease/index.html>

2次元コードからどうぞ ▼

